外　国　語

1　全般的事項に関する質疑応答

問１　高等学校学習指導要領の改訂の内容はどのようになっているか。

今回の外国語科の改訂に当たっては、平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、目標及び内容等に関して、次のような改善を図っている。

○外国語科の目標は、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、①各学校段階の学びを接続させるとともに、②「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にしている。

○各科目の内容と構成は、外国語教育において育成を目指す三つの資質・能力を確実に身に付け、小・中・高等学校を通じた領域別の目標の下で、具体的な指導や評価において活用されるよう内容の構成全体を改善している。

○各科目の内容は、小・中学校における学習内容との接続や統合的な言語活動を通した総合的な指導及び発信力の強化を図る観点から、次の点について改善している。

・「英語コミュニケーションⅠ」は、聞いたり読んだりしたことの概要や要点を目的に応じて捉えたり、基本的な語句や文を使って情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けたり、論理性に注意して話したり書いたりして伝える又は伝え合うことができるようになることを目標としている。取り扱う語は、小学校及び中学校で学習した語に400～600語程度の新語を加えている。

・「英語コミュニケーションⅡ」は、聞いたり読んだりしたことの概要や要点、詳細を目的に応じて捉えたり、多様な語句や文を使って情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話したり書いたりして伝える又は伝え合うことなどができるようになることを目標としている。取り扱う語は、「英語コミュニケーションⅠ」に示す語に700～950語程度の新語を加えている。

・「英語コミュニケーションⅢ」は、多様な語句や文を目的や場面、状況に応じて適切に使って、情報や考え、気持ちなどを論理的に詳しく話したり書いたりして伝える又は伝え合うことなどができるようになることを目標としている。取り扱う語は、「英語コミュニケーションⅡ」に示す語に700～950語程度の新語を加えている。

・「論理・表現Ⅰ」は、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、一つの段落を書くことなどを通して、論理の構成や展開を工夫して、話したり書いたりして伝える又は伝え合うことなどができるようになることを目標としている。

・「論理・表現Ⅱ」は、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、複数の段落から成る文章を書くことなどを通して、論理の構成や展開を工夫して、話したり書いたりして詳しく伝える又は伝え合うことなどができるようになることを目標としている。

・「論理・表現Ⅲ」は、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、複数の段落から成る文章を書くことなどを通して、聞き手や読み手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して、話したり書いたりして詳しく伝える又は伝え合うことなどができるようになることを目標としている。

○学習指導は、次の点について改善・充実を図っている。

・文法事項の指導では、用語や用法の区別などが中心とならないよう、実際のコミュニケーションにおいて活用できるようにするための効果的な指導を工夫する。

・「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」及び「書くこと」の指導に当たっては、目的や場面、状況などに応じたやり取りや発表、文章などの具体例を示した上で、生徒がそれらを参考にしながら自分で表現できるよう留意する。

問２　各科目における履修に当たって配慮すべき事項は何か。

履修に当たっては、次のことに配慮することとする。

(1) 「英語コミュニケーションⅠ」を必履修科目として設定する。

(2) 「英語コミュニケーションⅠ」については、標準単位数が３単位であるが、生徒の実態及び専門教育を主とする学科の特性等を考慮し、例外的に２単位とすることができる。標準単位数を減じる場合は、「英語コミュニケーションⅠ」の目標を実現できる範囲で行うことに配慮する必要がある。したがって、生徒の実態からみて、標準単位数を減じても、適切な言語活動を通して、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと［やり取り］」、「話すこと［発表］」及び「書くこと」の五つの領域別に設定された目標の実現が十分に可能であることを前提とした上で、慎重に検討される必要がある。

なお、今回の改訂においては、領域として「話すこと」を「話すこと［やり取り］」と「話すこと［発表］」に分けることにより、複数の話者が相互に話し伝え合う場合（「話すこと［やり取り］」）と一人の話者が連続して話す場合（「話すこと［発表］」）という特性の違いを明確にしている。

(3) 「英語コミュニケーションⅡ」は「英語コミュニケーションⅠ」を履修した後に、「英語コミュニケーションⅢ」は「英語コミュニケーションⅡ」を履修した後に、「論理・表現Ⅱ」は「論理・表現Ⅰ」を履修した後に、「論理・表現Ⅲ」は「論理・表現Ⅱ」を履修した後に、履修させることを原則とする。

(4) 「英語コミュニケーションⅠ」、「英語コミュニケーションⅡ」及び「英語コミュニケーションⅢ」（以下「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」という。）は、「論理・表現Ⅰ」、「論理・表現Ⅱ」及び「論理・表現Ⅲ」（以下「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」という。）と並行履修させることが可能である。

問３　各科目において、言語活動を行う際に留意すべき事項は何か。

各科目の「内容」には、「英語の特徴やきまりに関する事項」、「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」、「言語

活動に関する事項」、「言語の働きに関する事項」が共通して示されており、次のことに留意する必要がある。

【英語の特徴やきまりに関する事項】

語、連語及び慣用表現や文構造及び文法事項等を単に知識として理解させるだけではなく、五つの領域別の目標を達成するために、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導すること。

【情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項】

具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に適切な英語で表現することを通して指導すること。

【言語活動に関する事項】

五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して指導すること。

【言語の働きに関する事項】

五つの領域別の目標を達成するためにふさわしい「言語の使用場面」や「言語の働き」を取り上げ、有機的に組み合わせて活用すること。

２　英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲに関する質疑応答

問１　「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の指導上の留意点と目標との関わりは何か。

「英語コミュニケーションⅠ」は、高等学校の外国語科で英語を履修する場合、全ての生徒に履修させる科目として創設されたものである。この科目は、中学校における「英語」の学習内容との接続や高等学校での学習への円滑な移行を考慮しながら、五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、五つの領域を総合的に育成する科目である。

「英語コミュニケーションⅡ」は、「英語コミュニケーションⅠ」の学習を踏まえ、五つの領域の総合的な指導を発展的に行う科目であり、より自律した英語学習者の育成を目指し、「多くの支援」を活用する段階から、必要に応じて「一定の支援」を活用する段階へと移行する。また、「英語コミュニケーションⅠ」で指導された言語材料などの学習内容を言語活動において繰り返し活用したり、自分の考えを表現する際にそれらを話したり書いたりして表現できるような段階まで定着させることを目指している。

「英語コミュニケーションⅢ」は、「英語コミュニケーションⅡ」の学習を踏まえ、五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、五つの領域の総合的な指導を発展的に行う科目である。本科目では、英語使用者としての自律性を更に高めるために、支援がほとんどなくても課題に取り組むことができる段階へと移行し、日常的・社会的話題を取り扱う中で、より学術的な内容や、様々な事象を多面的かつ多角的に捉える内容を扱うこととなる。

また、小学校から中学校、高等学校に至るまで、児童生徒の発達段階に応じて、五つの領域ごとに設定された言語活動を通して、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表

現力等」を一体的に育成するよう目標が設定されている。更に、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」の育成の過程を通して「学びに向かう力、人間性等」に関する資質・能力を育成することを目指す必要があることも明確に示されている。

問２　「コミュニケーション英語基礎」がなくなったことにより、学び直しを必要とする生徒に対して、「英語コミュニケーションⅠ」でどのように対応するのか。

「英語コミュニケーションⅠ」の学習の初期段階において、中学校の外国語科で提示された言語活動のうち、高等学校の導入段階においても必要なものを繰り返し行い、中学校までの学びを高等学校の学びへ接続させる指導を行うことが求められている。併せて、中学校で指導された簡単な語句や文、基本的な言語材料などを、高等学校の言語活動において繰り返し活用することによって、生徒が自分の考えなどを表現する際にそれらを活用し、話したり書いたりして表現できるような段階まで確実に定着させることが重要である。

３　論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに関する質疑応答

問１　「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」における「書くこと」に係る指導上の留意点は何か。

「論理・表現Ⅰ」では、情報や考え、気持ちなどを適切な理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動において、読み手にとって読みやすく分かりやすい文章になるよう、論点を整理し、理由や根拠の示し方などに留意して書かせることが大切である。更には、「書くこと」の力や意欲の向上につなげられるよう、他の生徒の書いたものを読んだ上で、内容に関して生徒が意見を交換したり、教師が生徒の書いた文章を取り上げ、語句の使い方や内容の発展のさせ方などにおいてよかった点などを全体で共有したりするなど、適切で、効果的なフィードバックを行うことも大切である。

また、発想から推敲まで段階的な手順を踏みながら、「書くこと」に係る指導を行う際には、例えば次のような活動の流れが考えられる。

①書く内容についてブレインストーミングを行う。例えば、ペアやグループで自分の考えや気持ちを話して伝える活動をした後に、その内容を書く活動を行う。
②モデルとなる段落で書かれた文章例を使って、アウトラインの書き方を練習する。その後、自分の文章の段落の構成を考えてアウトラインを書く。
③モデルとなる文章例や他の生徒の作品などを活用して、意見や主張などを適切な理由や根拠とともに伝えるための表現などについて学ぶ。
④実際に文章を書いた後に、自分で読み返したり、他の人と読み合ったりして、内容について修正したり、書き間違いなどを訂正したりする。

「論理・表現Ⅱ」では、「論理・表現Ⅰ」で扱った一つの段落の文章を書く段階から、複数の段落をもつ文章を書く段階になることから、論理の構成や展開や使用する表現などが多様になることが考えられる。論理の構成や展開では、理由や根拠の示し方に留意

しながら、論点を明らかにしたり、順序付けを行ったりすることにより、読み手に分かりやすい構成や展開にすることが大切である。また、序論・本論・結論に対応する複数の段落の構成や、文章の種類に応じた効果的な論理の展開などについて指導する必要がある。

「論理・表現Ⅲ」では、「論理・表現Ⅱ」における活動を発展させ、読み手を説得することができる文章となるよう、情報や考え、気持ちなどを効果的な理由や根拠とともに複数の段落を用いて詳しく書いて伝える活動を行う。この際、読み手が納得したり、共感したり、同意したり、更に深く考えたりするように、聞いたり読んだりしたことから得た事実や情報とともに、調査や観察などで得られた資料などを活用しながら、それらを主張や意見を支える根拠として効果的に使用したり、自分の意見を、得られた情報や事実と区別して書いたりすることができるよう指導を行うことが大切である。

問２　「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」における「話すこと［やり取り］」及び「話すこと［発表］」の領域において、具体的な活動にはどのようなものがあるか。

「話すこと［やり取り］」及び「話すこと［発表］」における具体的な活動とその活動を行う際の留意点については、次のものが挙げられる。

ディベート	賛成又は反対の立場を明確にして、自分の立場の意見や考えがより妥当性や優位性があることを述べる活動である。 ペアで意見をやり取りしたり、グループでルールに従って議論したりするなど、様々な方法で行う。また、やり取りの目的や話題、生徒の習熟の程度などにより、適切な方法や形式を設定するなどの配慮が必要でがある。生徒に賛否両方の立場を経験させることにより、扱う話題について多様な観点から考察する力を育成することにつながる。
ディスカッション	互いに情報を交換したり、意見を出し合ったり、話題に関する理解を深め、互いの意見や主張の優れている点や改善すべき点を伝え合ったりする活動である。 ペアで簡潔な意見をやり取りしたり、グループで司会などの役割を決めて行ったりするなど、様々な実施方法が考えられる。やり取りの目的や話題、生徒の習熟の程度などにより、適切な方法や形式を設定する必要がある。また、司会者の役割やディスカッションを進める手順などを明確にし、生徒が意見を出し合いやすいように配慮することも重要である。
スピーチ	あるテーマについて、自分の考えや主張をまとまりのある形で述べる活動である。 単に暗記した文章を復唱させるような活動のみならず、スピーチの内容を生徒自身が考え、整理して、聞き手に効果的に伝えることができるように指導する必要がある。
プレゼンテーション	聴衆に対して情報を与えたり提案したりする活動である。 写真や実物、ポスターやスライド、タブレット端末などの視覚的な補助を活用することで、聞き手の注意を引き、理解を深めさせ、発表をより分かりやすくするように指導する必要がある。

4　「北海道高等学校学力向上実践事業」学力テストの分析

(1) 全道の概況

「コミュニケーション英語Ⅰ」の内容に関する学力テスト（北海道内の高等学校第１学年を対象）については、各学校の生徒の実情に合わせて、コアアビリティ（Ｃモデル）、ベーシック（Ｂモデル）、アドバンスト（Ａモデル）の３つのモデルから選択し、年度末に実施した。

過去３年の正答率の上昇から、全般的には各校における指導の充実が進みつつある。Ｂモデルにおいて「話すこと」の正答率は前年度に低下がみられたが、平成30年度では一昨年度よりも4.2ポイント上昇した。技能別の全体的な傾向として、「聞くこと」及び「読むこと」に比べ、「書くこと」及び「話すこと」の正答率は低い状況が続いている。

【過去３年の正答率の推移】

＜Ｃモデル＞

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
聞くこと	76.2%	77.9%	79.1%
読むこと	59.0%	64.2%	65.3%
書くこと	46.1%	46.8%	48.2%

＜Ｂモデル＞

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
聞くこと	70.9%	71.0%	71.2%
読むこと	55.9%	56.0%	56.6%
書くこと	6.5%	9.2%	11.8%
話すこと (無回答率)	13.7% (－)	10.3% (55.3%)	17.9% (46.0%)

＜Ａモデル＞

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
聞くこと	51.7%	55.5%	53.9%
書くこと	20.1%	21.3%	23.4%

＜「書くこと」無回答率＞

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
Ｃモデル	13.9%	9.1%	8.1%
Ｂモデル	6.4%	6.2%	4.7%
Ａモデル	4.1%	3.8%	8.7%

(2) 課題

「話すこと」については、Ｂモデルの正答率が7.6ポイント上昇した一方、無回答率は約半数となっている。また、Ａモデルにおける「書くこと」の正答率は2.1ポイント上昇しているものの、無回答率も4.9ポイント上昇した。Ｂモデルの「話すこと」及びＡモデルの「書くこと」の正答率と無回答率から、積極的に「話すこと」及び「書くこと」に挑戦する生徒が増えている一方、依然として「話すこと」及び「書くこと」に対して躊躇する生徒も一定数いることが分かる。

Ａモデルの「書くこと」に関する出題は、会話文中に指定された条件に当てはまるように作文をする形式と、与えられたテーマから書きたいものを選択し70語程度の作文をする形式の２種類であった。得点率は前者で約15%、後者で約30%であり、文脈を把握し論理的整合性の取れる内容を限られた分量で作文するには至らない生徒が多いが、少ない制約の中で自らの考えをある程度の分量で述べることは比較的できるという結果になっている。

(3) 改善の方向性

「話すこと［やり取り］」、「話すこと［発表］」及び「書くこと」については、理解した情報や考えなどを整理した上で、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、既存の知識や体験などとも関連付けながら判断し、適切に表現したり伝え合ったりするように指導することが大切である。

５　新学習指導要領を踏まえた現行学習指導要領における実践

実践事例　ＩＣＴを活用して理解を促進し、学びに対する動機付けを与え、発信力を強化する取組について

現行の学習指導要領においては、ＩＣＴを指導上有効に活用することに配慮することが求められている。また、新学習指導要領においても、指導に当たっては、視聴覚教材やその他の教育機器を有効活用することが求められている。写真や映像を見せることで、理解を促進し、現実感や臨場感を与え、学びの動機付けやきっかけを与えるとともに、パワーポイント等を活用し聞き手を意識した発表を行うことで発信力の強化につなげることができる。

ここでは、「コミュニケーション英語Ⅰ」において、画像や動画等を用いることにより、「話すこと」と「書くこと」を結び付けて指導する実践例を示す。

◆　画像や動画等を活用することに配慮した単元の指導計画

単　元　名	Dick Bruna（全７時間）			
単元の目標	・基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを伝え合うやり取りを続けることができる。 ・必要な情報を読み取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができる。 ・聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができる。			
評価の観点	関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	知識・理解
評 価 規 準	理解できないことや未知の語句があっても、推測するなどして読み続けている。	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに関して概要や自分の意見を話すことができる。	英語を聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。	「書くこと」の言語活動に用いられている語句や文構造、文法事項などについての知識を身に付けている。

次程	学習内容と問い（または評価規準等）　※枠囲みはICTを活用する場面	評価の観点 関	表	理	知
第１次	【学習内容】MiffyやDick Brunaの生涯について理解を深める。 【問い】Dick Brunaはどのような画家に影響を受けたのだろうか。 ・教師は、画像や動画 等を用いて、自分の好きなキャラクターについて述べ、その際、本文で使用される語句や文を示す。 ・生徒は、ペアになり、各自の好きなキャラクターについて、英語でやり取りをする。 ・教師は、ペアを変え生徒にやり取りを続けさせることで、やり取りに慣れさせる。 【問い】Dick Brunaが表現する世界はどのようなものだろうか。 ・生徒は、Dick Brunaの人物伝を黙読し、必要な情報を読み取り、概要や要点を捉える。 ・生徒は、理解できないことや未知の語句があっても、推測するなどして読み続ける。 ・教師は、画像や動画 等により視覚情報を与え、文章の概要の理解を助ける。	○		○ 主体的な学び	
第２次	【学習内容】関係代名詞の制限用法と非制限用法について理解を深める。 【問い】関係代名詞の制限用法と非制限用法の使われ方の違いは何か。 ・教師は 画像や動画 等を活用して、関係代名詞の非制限用法の具体的な使用場面とどのような働きをするのかについて例示し、生徒が実際の場面で活用できるよう指導する。 【学習内容】Miffyが使われたチャリティキャンペーンについて理解を深める。				○
第３次	【問い】Miffyが使われたチャリティキャンペーンとはどのようなものか。 ・生徒は、グループになり、Miffyが使われたチャリティキャンペーンについて調べる。 ・生徒は、グループで話し合い、伝えようとする内容について、調べた内容や関係代名詞の非制限用法を活用してアウトラインを書いたり、発表のメモを書く。 ・生徒は、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して、パワーポイント 等を活用して聞き手に分かりやすく伝える。 ・生徒は、話すための原稿を読み上げることだけに終始せず、聞き手に分かりやすく伝えることを意識しながら話す。 ・教師は、各生徒にお互いの発表を聞いて評価させるとともに、自己評価をさせ、各自が振り返ったことを次の学びにつなげさせる。		対話的な学び 深い学び ○ 主体的な学び		

Topic 「留学の促進」について

道教委では、平成12年度から、北海道と海外の高校生を交換留学させ、相互に異文化を体験することにより、国際的な視野を持った青少年を育成し、併せて、道・州間の友好と親善に資することを目的とした「高校生交換留学促進事業」や、留学に係る費用を補助金として交付することにより、高校生の留学を促進するとともに、高校生等に対する国際的視野の涵養及び留学機運の向上を図ることを目的とした「高校生留学促進事業」に取り組んでいる。

ここでは、本事業の取組について紹介する。

高校生交換留学促進事業

1　アルバータ州との交換留学

◇　留 学 先　カナダ・アルバータ州内の公立高等学校
◇　期　　間　２カ月間（留学及び受入）
◇　内　　容　・学校の授業や学校行事等への参加
　　・家庭でのホームステイ
◇　応募資格　・国際交流、国際理解教育及び外国語教育に積極的に取り組んでいる者
　　・基礎的な英会話の能力があり、その向上に意欲的に取り組める者
　　・異文化や異なる習慣、考え方を尊重し、共に学び合い、高め合うことができる者　など
　　※高等学校等の第１学年又は第２学年に在学中であること

【現地での交流の様子】

2　ハワイ州との交換留学

◇　留 学 先　米国・ハワイ州立ワイパフ高等学校
◇　期　　間　１週間（留学及び受入）
　※内容及び応募資格は、基本的にアルバータ州との交換と同様
　※現在の北海道における受入先は、北海道登別明日中等教育学校のみ

【現地での交流の様子】

【交換留学に参加した生徒の感想（抜粋）】
・ハワイで多くの友達ができ、もっと様々な国の方と交流したいと思った。
・帰国後の英語の授業で、他の生徒の発音を聞き取ることができるようになったり、自分の言いたいことを前より伝えられるようになった。
・母語の異なる方とコミュニケーションをとることにより、自分自身のコミュニケーションスキルが高まったと感じた。

高校生留学促進事業

1　留学支援金の給付

◇　対象生徒　道内の国公私立の高等学校、中等教育学校（３年次から）、特別支援学校高等部、高等専門学校（１年次から３年次）及び専修学校高等課程に在籍する生徒
　　※中等教育学校の３年次の場合、留学期間中に当該学校の後期課程に在籍見込であり、当該学校長によって４年次の留学が許可されていることが条件
◇　予定人数　１プログラム　20名以内（学校単位での応募とする）
◇　留学期間　原則２週間以上１年未満
◇　対象経費　・留学費用のうち、自宅から留学先までの１往復分の交通運賃
　　・外国の正規の後期中等教育機関に納付する授業料　・施設利用費等
　　・出国手続諸費用　・査証（ビザ）及び旅券（パスポート）取得手続諸費用
　　・海外傷害保険料　・寮費　・ホストファミリーに支払う費用　など

2　北海道海外大学進学・留学フェア

◇　目　的　・グローバル人材（国際的な視野を持った人材）の育成
　　・海外留学や海外大学進学への意欲の喚起
◇　内　容　・留学斡旋団体や英語圏を中心とした国の大使館・領事館等の職員による講演
　　・海外留学や海外大学への進学の相談
◇　対　象　・海外留学や海外大学への進学に関心のある高等学校、中等教育学校後期課程、特別支援学校高等部の生徒
　　・保護者及び教職員